THE 16th
FUKUOKA ASIAN CULTURE PRIZES 2005
2005年（第16回）福岡アジア文化賞

大　賞
GRAND PRIZE

イム・ドン　グォン
任　東　権　IM Dong-kwon

韓国中央大学校名誉教授　Honorary Professor, Chung-Ang University
1926年5月22日生　Born May 22, 1926
韓　国　Republic of Korea

略　歴

1926	韓国、忠清南道に生まれる
1951	国学大学国文学科卒業
1954	国学大学民俗学講座担任
1959－74	ソラボル芸術大学教授（61－71年、学部長）
1959－91	韓国民俗学会会長（91年、名誉会長）
1964－99	文化財委員会委員
1968	又石大学校文学博士
1971－2001	ソウル特別市文化財委員会委員
1974－91	中央大学校教授（91年、名誉教授）
1976－	国立民俗博物館資料審議委員
1979－80	百済文化研究院院長
1982	ソウル特別市文化賞（人文科学賞）
1982	文化勲章（銀冠章）
1988	五・一六民族賞（学術賞）
1989－93	韓国民謡学会会長（94年、名誉会長）
1990－	韓国文化財保護財団理事
1991	国民勲章（牡丹章）
1996－	韓国比較民俗学会顧問

主な著作

『韓国民謡集』1巻:東国文化社,1961/ 2－7巻:集文堂,1974－92
『韓国民謡史』初版:文昌社,1964（以後、集文堂より再版）
『韓国民俗学論攷』宣明文化社,1971（日本語訳:『韓国の民俗と伝承』桜楓社,東京,1984）
『韓国の民譚』瑞文堂,1972（英語訳:1974、ドイツ語訳:1975、日本語訳:『韓国の民話』雄山閣出版,東京,1995）
『韓国婦謡研究』集文堂,1982
『韓国歳時風俗研究』集文堂,1985
『韓国の民俗大系』（韓国民俗総合調査報告書）1－5巻,（日本語）編著・共訳,国書刊行会,東京,1988－92
『韓日宮中儀礼研究』中央大学校出版部,1995
『日本の中の百済文化』奎章閣,1996（日本語訳:第一書房,東京,2001）
『大将軍信仰の研究』（日本語）第一書房,東京,2001
『韓日民俗文化の比較研究』（日本語）岩田書院,東京,2003
『通信使と文化伝播』民俗苑,2004（日本語訳:『朝鮮通信使と文化伝播』第一書房,東京,2004）

※言語表記のないものは韓国語で出版。出版地の記載のないものはソウルで出版

贈賞理由

任東権氏は、韓国民俗学の開拓者であり、東アジア民俗学界の第一人者である。

1954年に韓国で初めて国学大学に民俗学講座が開設された際、28歳の若さで同講座の担任となった。朝鮮戦争の余塵くすぶる中、民族アイデンティティの再確立を目指して始めた研究は、韓国民族文化に対する認識を高揚させるとともに韓国民俗学を独立した学問へと発展させた。

ソラボル芸術大学、中央大学校の教授として教育・研究に勤しむ傍ら韓国民俗学会、韓国民謡学会の会長を歴任した。また、百済文化研究院院長、韓国文化財保護財団理事などとして文化財の発掘・保護にも活躍、これらの永年の功績により文化勲章をはじめとする数々の国家的栄誉賞を授与された。

任氏の研究フィールドは、韓国にとどまらず日本・中国にも及ぶ。比較民俗学の手法を用いて韓国・日本・中国の文化交流を研究し、韓国民俗の独自性を解明した。1996年以来、韓国比較民俗学会の顧問に推戴されるなど、東アジア民俗学界でも第一人者として高く評価されている。同氏が養成した人材は韓国・日本の民俗学界で広く活躍をしている。

任氏は元来、韓国の民謡研究が専攻であったが、次第に口碑文学・民俗芸能・歳時習俗・民間信仰・シャーマニズムなどの広い分野に及び、その研究成果としての単著・共著・編著は約50冊にのぼる。中には『韓国の民俗大系』（第1～5巻）、『韓国の民俗と伝承』のように日本語に翻訳されたものもあり、初期の代表作の一つ『韓国の民譚（みんだん）』は、1970年代にドイツ語・英語に、1995年に日本語に訳され、世界で広く読まれている。

中学時代を戦時中の東京で過ごした任氏は、日本民俗学界との縁も深く、日韓国交正常化に先立つ1963年から40年間、北海道から沖縄まで日本の各地で民俗調査を続けるとともに、日本人との共同研究も推進した。『韓日民俗文化の比較研究』は、自ら日本語で書いたものであり、『日本の中の百済文化』『朝鮮通信使と文化伝播』などは、任氏の韓国語原稿を日本人が翻訳したものである。これらの著書は、日韓文化の単なる比較研究ではなく、一貫して「韓国からみた日本の民俗」という視座に立ち、日本文化研究の定説に新しい解釈を加えるものとして高く評価されている。

このように任東権氏は、韓国を中心とする東アジアの民俗を総合的に比較研究するとともに、国際的なアカデミックリーダーとして韓国・日本・中国の共同研究の進展に貢献してきた。その業績は東アジア民俗学界に輝く巨星というべく、「福岡アジア文化賞－大賞」にふさわしい。

学術研究賞
ACADEMIC PRIZE

トー・カウン	Thaw Kaung
ヤンゴン大学中央図書館前館長	Retired Chief Librarian, Universities Central Library, Yangon
1937年12月17日生	Born December 17, 1937
ミャンマー	Myanmar

略　歴

1937	ミャンマー、ヤンゴンに生まれる
1959	ヤンゴン大学卒業（英語学）。ヤンゴン大学図書館副館長
1960－61	ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジで東洋書誌学の特別講座を履修
1962	ロンドン大学卒業（図書館学）。英国図書館協会認定司書および正会員候補
1965－80	ミャンマー研究協会名誉司書および出版担当者
1969－97	ヤンゴン大学中央図書館長。貝葉（ばいよう）写本およびパラバイ写本特別部門を設立し16,000束を超える写本を収集
1971－97	ヤンゴン大学図書館学部（97年図書館情報学部に改組）設立。学部長兼教授
1971－76	ミャンマー言語委員会事務局長
1976	西オーストラリア工科大学（現カーティン大学）より図書館学教授資格を授与される オーストラリア図書館情報協会会員
1984－85	英国図書館東洋・旧インド省コレクション顧問司書（91－92年に再任）
1984	英国図書館協会名誉研究員
1992－	ミャンマー図書館協会創設者
1993－	ミャンマー文芸賞選考委員会副委員長
1998－	ミャンマー歴史委員会委員、伝統写本保存委員会副委員長
1998	ヤンゴン大学図書館情報学部名誉教授
1999	オーストラリア国立図書館ハロルド・ホワイト研究員 西シドニー大学名誉文学博士
2002	大阪、国立民族学博物館客員教授

主な著作

＜ミャンマー語＞

『図書館マニュアル』サーペイ・ベイクマン（文学研究所）出版,1962（1971から重版）

『ミャンマー文学に関する文献目録』（共編）サーペイ・ベイクマン出版,1983

『参考図書資料について』サーペイ・ベイクマン出版,1985

『ミャンマー語への翻訳について』サーペイ・ベイクマン出版,1991

＜英語＞

『ビルマに関する英文定期刊行物索引、1948年1月から1960年12月』［ロンドン大学への提出論文］,1962

『ミャンマー美術・考古学文献目録』［CD-ROM］（共編）ロンドン大学東洋アフリカ研究院,ロンドン,1993

「ミャンマーで編纂された文献目録」（『ミャンマー研究:ドゥニーズ・ベルノ記念論集』所収,フランス極東学院,パリ,1998）

『チェンマイ年代記』スィトゥ・ガマニ・ティンジャン著,（共訳）大学歴史研究センター,2003

『ウー・トー・カウン選集』ミャンマー歴史委員会創立50周年記念出版委員会,2004

※出版地の記載のないものはヤンゴンで出版

※1989年6月以降、ミャンマーでは対外的な呼称を現地語に統一。上記国名・地名は原則として1989年6月以降の呼称を使用

贈賞理由

トー・カウン氏はミャンマーを中心とするアジア図書館学とりわけ古文献保存学の泰斗であり、約1,000年におよぶ種々の貝葉（ばいよう）写本（ヤシの葉で作られた古文献）などの保存に努めると同時に広くそれを閲覧に供し、ミャンマー人がそれらの資・史料を用いて自国語で自国研究ができる体制づくりに貢献した。同氏は古文献保存功労者であり、図書館学においてアジアを代表する先駆者の一人である。

トー・カウン氏は健康問題を抱えながらも勉学に勤しんで進学し、ヤンゴン大学では英語学と文学を専攻、首席で卒業した。その後、ロンドン大学にて図書館学の学位を取得、英国図書館協会認定司書となり、同協会の正会員候補に推挙された。

帰国後、1969年にトー・カウン氏はヤンゴン大学中央図書館長に就任し、地道な司書教育と貝葉写本などの保存に取り組んできた。自らミャンマー語で司書の入門・貴重書取り扱いについての教材を執筆し、また、これまで虫食いと乾燥破損の危機に直面していた貴重な仏教経典などの貝葉写本を約16,000束も収集し、そのために図書館内に特別の空調設備のある保存室を造った。同図書館には19世紀以前にさかのぼる世界で初めての貝葉写本の複製本が所蔵されている。特にそれら写本類は、仏教経典註釈本としてロンドンのパーリ語仏典協会から英訳付きで順次刊行され、広く活用に供されている。

さらにトー・カウン氏は1971年にはヤンゴン大学に図書館学部を設立し、本格的な専門の司書の養成に努め、図書館学の大学院設立に大きな役割を果たした。これまでに、図書館学関係の著書の執筆に加え、ミャンマーの伝統文化と古文献保存について様々な著書や研究論文をミャンマー語と英語で発表し、啓蒙活動にも尽力。国内ではミャンマー図書館協会や伝統写本保存委員会の設立に大きな役割を果たす一方で、1984年および1991年には英国図書館、1989年にはシンガポールの国立東南アジア研究所の顧問司書などを務め、近年はミャンマー・タイの研究者とともにタイのチェンマイについてミャンマー語で書かれた貝葉写本の英語翻訳にあたるなど、国際的にも活躍している。

このようにトー・カウン氏はミャンマーをはじめアジア各国の貴重な古文献である貝葉写本などの保存と活用に大きな貢献を成し遂げ、その成果として自国語による歴史研究の道を拓いたばかりでなく、早くから貝葉写本の保存の意義をアジアそして世界に広く提示したことが高く評価できる。まさしく「福岡アジア文化賞－学術研究賞」にふさわしい。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

ドアンドゥアン・ブンニャウォン | Douangdeuane BOUNYAVONG

織物研究家 | Textile Researcher

1947年6月11日生 | Born June 11, 1947

ラオス | Lao People's Democratic Republic

2005年（第16回）受賞者

略　　歴

1947	ラオス、ヴィエンチャンに生まれる
1968	ヴィエンチャン教員養成大学（現ラオス国立大学教育学部）卒業
1973	フランス、アミアン大学で物理・化学の修士号を取得
1973－79	ヴィエンチャン教員養成大学講師
1981－85	モスクワ、プログレス出版社にてロシア文学のラオ語への翻訳に従事
1985－90	ラオス情報文化省、芸術・文学研究所編集者
1990	「芸術とラオス織物を推進するグループ」を女性5人で設立
1991－95	ユニセフの助成によりラオス女性同盟が立ち上げた「ラオス織物の保存と推進プロジェクト」のコンサルタント。プロジェクトの一環として91年に織物ギャラリー「シン・サイ・マイ」を設立
1991	『桑の葉から絹織物まで』ビデオ制作プロデューサーおよび脚本を手がける
1992－93	フルブライト奨学金をうけ、ワシントン大学にて客員研究員およびラオ語講師
1994	国際交流基金助成により、上智大学アジア文化研究所客員研究員
1995－	「ラオスの子どもに絵本を送る会」編集者兼アドバイザー
1996－98	国際交流基金アジアセンター助成により、「ラオス織物、織り・染めの技術に関する比較研究プロジェクト」の研究員を務める
1997	織物ギャラリー「ホーテンテンギャラリー」設立
1997－99	トヨタ財団助成による「タオ・フン、タオ・チュアン叙事詩の現代散文への翻訳プロジェクト」のリーダーを務める
2003－	ドークケード出版社代表取締役
2004－05	ラオス教育省、教師養成カリキュラム開発プログラムコンサルタント

主な織物展示会・ワークショップ

1990	ヴィエンチャン
1992	チェンマイ（タイ）、シアトル（アメリカ）
1994	町田（日本）
1995	シエンクワン、ヴィエンチャン
1996	ヴィエンチャン
1997	アンジェ（フランス）、横浜（日本）

主な出版物

『マハー・シラー・ウィーラウォン:生活と作品』国立文化社会研究所,1990
『タオ・フン叙事詩に見る儀式と伝統』ラオス情報文化省文学・文化局,1991
『無限のデザイン－絹の芸術－』ラオス女性同盟,1995
『絵入り辞典』小学生向けラオ語辞典,ラオスの子どもに絵本を送る会,初版:1995、第二版:1996、第三版:1997
『織りの伝説』芸術とラオス織物を推進するグループ,タイ,2001

※出版地の記載のないものはヴィエンチャンで出版

贈賞理由

ドアンドゥアン・ブンニャウォン氏は、ラオスの伝統文化、特に織物の振興と伝統技術の保存、ラオス文学の研究と普及に貢献するラオスを代表する文化人である。

知的環境に恵まれた家庭に生まれたブンニャウォン氏は、ラオスおよびフランスで高等教育を受け、帰国後、ラオス古典文学と伝統文化の研究に打ち込んだ。ラオス古典叙事詩「タオ・フン、タオ・チュアン」の研究に没頭し、そのなかに表現されたラオスの儀礼や伝統についての研究成果を出版し、高い評価を得た。

ラオス古典文学の研究を進める中から芽生えたラオスの伝統文化に対するブンニャウォン氏の関心は、文学だけにとどまらず、代表的な伝統文化の一つである織物の研究に向かった。ラオスでは、それぞれの家族ごとに特徴のある織物や衣装があるといわれるくらい織物の世界は多彩である。これらの織物に織り込まれたさまざまなモチーフの意味するものを研究することから、同氏の活動はラオス伝統織物の歴史研究のみならず、伝統織物の技術保存と継承の啓蒙活動、織物を織る女性の社会的地位の向上を目指す運動、織物の外国への紹介など、織物をめぐる幅広い活動へと発展してきた。

1990年に女性5人で「芸術とラオス織物を推進するグループ」を設立し、本格的に織物とその伝統技術の保存活動を開始した。1991年にユニセフの助成によりラオス女性同盟が実施した「ラオス織物の保存推進プロジェクト」のコンサルタントを務め、プロジェクトの一環として織物ギャラリー「シン・サイ・マイ」を設立した。同年チェンマイ大学で開催された「アジアの織物」会議にラオスを代表して出席し、さらには責任者としてデザインを指導した織物を出品して、ユネスコ・アジア工芸品賞を受けた。また、国内のみならずタイ、アメリカ、フランス、日本においても織物の展示会・ワークショップを行うなど、ラオス伝統織物の復興と発展のために積極的な活動を展開している。1995年に出版された『無限のデザイン－絹の芸術－』はラオス人が書いた初めてのラオス伝統織物の研究書として内外から高い評価を得た。さらに、日本の国際交流基金のプロジェクトにより織物の研究を推進し、その成果として2001年『織りの伝説』を出版した。

「ラオスの伝統織物はラオスの文化の根幹を成すもの。この伝統技術を守りたい」との強い決意に支えられた幅広い活動は、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存、継承、発展に大きな貢献をしている。ブンニャウォン氏こそ「福岡アジア文化賞－芸術・文化賞」にふさわしい。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

タシ・ノルブ	Tashi Norbu
伝統音楽家 「タシ・ネンチャ」ディレクター	Traditional Musician, Director of "Tashi Nencha"
1960年1月1日生	Born January 1, 1960
ブータン	Bhutan

2005年（第16回）受賞者

略　歴

1960	ブータン、ティンプーに生まれる
1983	インド、シロン、ノース・イースタン・ヒル大学学士（英語専修）
1987 –	伝統音楽保存・普及のために「タシ・ネンチャ」を結成。ディレクターをつとめ、ブータンで唯一のプロの民間伝統音楽グループとして活動を開始
1990	ブータン国営放送局（BBS）のテーマ音楽を作曲
1993	日本NHK制作ドキュメンタリー『鶴の声』のテーマ音楽、ブリティッシュ・エアロスペース社制作ドキュメンタリー『空の王国』のテーマ音楽を作曲
1995	ブータン各地の民族舞踊・仮面舞踊をタシ・ネンチャの活動に取り入れる
1997	ブータン政府から研修のためオランダ、アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭に派遣
1997	ブータン政府の要請により、ティンプーで民間グループとしては初めてライブコンサート
1998	国際交流基金、外国文化紹介事業により初来日。全国7ヶ所で公演
1998	第4代ブータン国王即位25周年を記念するテーマソングを作詞・作曲
2000	大阪府堺市 世界民族芸能祭「わっしょい！2000」および兵庫県 淡路花博ジャパンフローラ2000の「ブータンナショナルデー」で公演
2004	香港で公演
2005 –	ブータン映画協会副会長に就任

主な作品

＜カセットテープ＞　演奏:タシ・ネンチャ

ミュージック・フロム・ザ・ドラゴン・キングダム（1990）
ダウ・ブツ［歌と掛け合い］（1993）
ガウェイ・ガウェイ［民謡 II］（1994）
トラディショナル・インストゥルメンタル（1990）
トゥン・トゥン［民謡 I］（1994）

＜CD＞　演奏:タシ・ネンチャ

ザント・ペリ［伝統音楽］（2000）
マントラ・オブ・ザ・ロータス・ボーン（2001）
オム・マニ・パトメ・フン（2001）
マントラ・オブ・メディシナル・ブッダ（2001）

＜ビデオ＞

アプ・ウォンデュゲ［伝説上の人物を描いた民話］（1990）
グコル［ユーモア、機知、知恵］（1999）
ダウ・ブツ［農村の生活、ラブ・ストーリー］（1993）

＜ドキュメンタリー＞

ブータンの民族音楽（1993）
ライブコンサート［音楽、舞踊、劇］（1997）
第70代ジェ・ケンポの祝聖式（1996）

贈賞理由

タシ・ノルブ氏は、ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるパイオニアである。

ヒマラヤに位置する人口約70万人の王国・ブータンは、チベット仏教とともに古くからの伝統文化を育んできた。国は政策としてその伝統文化や自然環境を保つ努力をしているが、グローバリゼーションの波は徐々にブータン社会にも押し寄せ、人々の営みとして伝承される音楽についても、大きな影響を与えつつある。

音楽家・舞踊家である父のもとでブータン伝統音楽への深い関心を持っていたタシ・ノルブ氏は、外国音楽の強い影響を受けて伝統音楽が消えていくという危機感の中で、1987年にブータンで初めて、民間の伝統音楽グループ「タシ・ネンチャ」を結成した。当時、民族音楽・舞踊の保存と発展のため、王立の舞踊団は既に存在していたが、ブータンにおいて、このような目的のため個人がグループを結成して活動するということは、非常に画期的なできごとであった。

1990年代、「リグサー（流行歌）」が大衆に人気を博す音楽情況の中、タシ・ノルブ氏は一貫して伝統音楽の保存の重要性を説き、「タシ・ネンチャ」のディレクターとして、若い世代に継承する独自の活動を精力的に続けてきた。ブータンの伝統音楽において歌と踊りは不可分であるため、同氏は1995年から舞踊も同グループの活動に取り込んだ。ブータン中部地域を中心に、それまでブータン国内においては記録されてこなかった音楽や舞踊を保存するために、できうる限り厳密に再現する努力を続けている。また、伝統を保持しながらもその音楽性を高めるため、楽器の改良を試みるなど、伝統音楽の発展にも力を注いでいる。

また「タシ・ネンチャ」を率いて数度の海外公演を行い、ブータン伝統音楽、ひいてはブータン文化の特色を世界に発信し、民間の文化使節的役割も果たしている。さらにタシ・ノルブ氏は、ブータン人自身の手による初めてのドキュメンタリー『ブータンの民族音楽』を撮影するなど、映像作品による文化の記録・保存にも大きく貢献している。

現代文明の潮流の中で、急速に変容しつつある伝統音楽を守り継承する努力を、民間にあって情熱的に続けているタシ・ノルブ氏の活動は、「福岡アジア文化賞－芸術・文化賞」にふさわしい。

授賞式

日　時： 9月15日(木) 14:00～16:20
会　場： 福岡国際会議場 メインホール

秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、大使館関係者、国際交流団体、経済団体、大学関係者、留学生、地域団体及び市民など約1,000名が見守る中、厳かな雰囲気で式典が行われた。

式典では、まず映像で受賞者の業績を紹介した後、会場からの盛大な拍手に迎えられ受賞者が入場した。その後、主催者代表挨拶、秋篠宮殿下からのお言葉、選考経過報告が行われた後、主催者より各受賞者に賞状とメダルが贈呈された。続いて各受賞者がスピーチを行い、受賞の喜びやアジアの文化に対する考え、市民へのメッセージなどを語った。最後に、福岡インターナショナルスクールの生徒たちから各受賞者へ花束が手渡され、会場は再び大きな拍手に包まれた。

また、特別演奏として、韓国のシンガーソングライター Ryu が出演し、式典に花を添えた。

受賞者あいさつ

大　賞
任　東　権（イム・ドン　グォン）

この度、福岡市と財団法人よかトピア記念国際財団が定めた福岡アジア文化賞を受賞し、身に余る光栄であり、心から御礼申し上げます。

私の専攻は韓国民俗学であり、周辺民族との交流や文化の伝播にも関心があって比較民俗学にも研究領域を広げ、南の方は日本、台湾、東南アジアを旅行し、北の方は蒙古、中国、サハリンにて民俗調査を行ったことがあります。その結果、北を根源とする文化の南下現象が多いということを知るにいたりました。

韓国は大陸の一半島で、海の向こうに日本列島があり、大陸からの先進文化が韓国を経由して日本に伝播するという交流が古くから行われていました。ここで忘れてはならないことは、約2万年前に地殻の変動があり、陸地の一部が水没して、日本は島となり大陸から孤立したことです。つまり、2万年より以前は大陸の一部であったため歩いて往来し、同じ文化を共有したであろうということです。このことから、日本の古代文化を考える時、現在の玄界灘だけを意識するのではなく2万年前の状況、即ち日本も大陸の一部であったことを認識しなければならないのです。

海に断絶されてからは往来が不可能でしたが、2千年ないし3千年前頃から造船技術と航海術が発達し往来が可能となり、大陸文化が韓半島を経て日本へ伝播され交流が頻繁なものになりました。福岡市は地理的にその窓口の役割をいたしました。

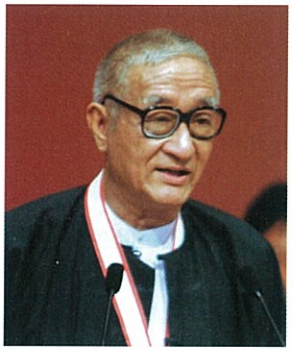
私は伝播論の観点から、日本の民俗文化にも関心をもつに至り、『日本の中の百済文化』、『大将軍信仰の研究』、『通信使と文化伝播』が日本で翻訳出版されました。私は、広い意味でアジア文化の真実を知りたいと思っています。同じ文化を共有することは、相互の信頼感を高め、理解を深めて、共存を可能とし、平和をもたらします。

主催者が賞の名称を「福岡アジア文化賞」と定めたのは、国家や民族を超えて相互理解を進め、共存しようとする意味があったものと理解しております。主催者に敬意を表し、感謝申し上げます。

終わりに、授賞式にご参席くださいました多くの皆様に感謝申し上げます。

ありがとうございました。

受賞者あいさつ



学術研究賞
トー・カウン

栄えある福岡アジア文化賞を授与していただき、まことに光栄に存じます。図書館司書としては初めて、そしてミャンマーからは2人目の受賞者としてこの賞をいただけることは、司書という職業にとっても、私の国ミャンマーにとっても非常に栄誉なことだと思います。

私は約40年間、ヤンゴン大学内にある数々の図書館で司書として働き、退職するまでの28年間は大学中央図書館長を務めました。1971年には、ヤンゴン大学に図書館学部を設立するという機会にも恵まれました。私はこの職業に全身全霊を傾け、人種、国籍、宗教にかかわらず、情報を必要とするすべての研究者や読者の求めに応じてきました。貝葉やパラバイと呼ばれる手製の紙に書かれた貴重な写本を収集し、過去の文学や史料を保存することによって、私の国そして国民、ひいては東南アジアやアジア全体の役に立ち、アジアの文化をより一層豊かなものにできたことは、私にとって非常に名誉なことでした。

図書館司書は、増え続けていく情報や知識を媒介するという重要な役割を担っています。20世紀の終わりから21世紀の初めにかけて、科学、技術、人文科学、芸術、文化という人間がたゆまぬ努力を注いでいるあらゆる分野において、情報が爆発的に増加しました。この貴重な情報や知識の宝庫を整理し、誰もが利用できるようにすることが、司書の重要な役割なのです。同時に知識の管理人として、この世のすべての人々に平穏で寛容な心を、対立ではなく協調の心を育み、お互いが調和して生きてゆけるような道を創り出していくことも求められているのです。

ミャンマーに図書館と呼ばれるものができてから1,000年以上も経ちますが、50年ほど前、私が最初に司書になろうと志した頃は、ミャンマーではまだ司書という職業はあまり知られておらず、その職に就いていたのは外国で学んできたほんの一握りの人々だけでした。「あまり人が歩まない道」を選択したことで、私の人生は大きく変わりました。また、これまで私が関わってきた多くの人々の人生も変わったであろうことを念願いたします。

司書として、そして図書館学の教師として意欲的に活動してきた40年の間、私は多くの生徒達に、すべての人々に対してサービスの精神を持ち、あらゆる事に心を開き、様々な時代の書籍に秘められている人類の価値を守っていくよう教え続けてきました。

この場をお借りして、福岡の皆様、そして福岡市とよかトピア記念国際財団に対して、福岡アジア文化賞を創設するという寛大な心と先見の明をお持ちであったこと、そして私を本年の学術研究賞に選んでいただいたことに深く感謝いたします。同時に、私の仕事を常に支えてくれ、本やあらゆる書物に埋もれながらも生活をともにしてくれた私の妻、そして私の家族、特に3人の息子たちにも感謝しています。

最後に、本日ご出席いただいたすべての皆様、特に福岡の皆様、日本の皆様の平和と繁栄と発展をお祈りし、そして皆様が新たな情報化社会をうまく乗りきることができますよう祈念いたします。

ありがとうございました。

受賞者あいさつ

芸術・文化賞
ドアンドゥアン・ブンニャウォン

第16回福岡アジア文化賞の受賞者となれましたことは、私の人生においてこの上なく幸せな瞬間です。この名誉は、私にだけではなく、伝統的な染織技術を代々受け継ぎ、日常に用いる美しい布を織ってきた過去そして現在のラオスの織り手全てに対する名誉であります。

私は、福岡市民そして福岡アジア文化賞委員会が文化に高い価値を置いておられることに、深く感銘を受けました。芸術と文化は全人類に属すものです。自由に交流が行われ、共有され、楽しまれるものでなければなりません。80歳になる日本の学者がかつて私に、文化は皆で守っていくものであり、誰かの命令を受けて行うものではない、と話されました。私はこの言葉を忘れず、それを人生の信条としてまいりました。

古い織物のような伝統文化を保存する取り組みが、個人で行われることは稀です。多くの困難にぶつかり、他の人に誤解されることもあります。私がこの取り組みを始めたとき、この分野での知識はまったくありませんでした。しかし、私の亡き父が行っていた貝葉（ばいよう）に書かれたラオス古文献の研究には大いに助けられました。そのおかげで、外国の学者であれば言葉の壁のために得られないような特別な情報をたくさん得ることができたのです。

アジアにおける染織の伝統は1,000年にわたって受け継がれてきました。わが国には困難な時代もありましたが、ラオスの織り手は染織の道具を手放すことはありませんでした。その忍耐強さのおかげで、手織りのスカートは今なお、ラオスの文化を最も代表するもののひとつとなっています。織物を織ることによって、教育を受けていない女性が家族のために収入を得ることができ、満足できる社会的立場を手にしています。これらの女性は、古い織物を手本に織ります。しかし、1990年代に外国に門戸を開いた時、古い織物を含む芸術や工芸の多くが危機にさらされました。これらの織物を自国で保存しなければならない。それが私の目標となりました。古い織物の歴史的・文化的価値に対する意識を高めるために、NGOおよび官民両方の国際組織からの資金援助を受け、多くの活動やプロジェクトを実施してまいりました。結果は実にすばらしいものです。1992年には、ラオス女性同盟が、織物ギャラリー「The Art of Silk－絹の芸術」を設立しました。草の根レベルでの生産がますます盛んになり、地元の作品を展示するショールームを開設した県もいくつかでてきています。女子学生は、母親の織機で織った制服を着用しています。また、私自身も、小規模ながらラオスの古い織物を自分のプライベート・ギャラリーに展示しています。仲間と協力して、詳しい模様やモチーフの説明を添えて発行した、ラオス染織の歴史に関する本は、織物再現の見本として使っていただくことができます。

私の家族と一族を代表して、福岡アジア文化賞委員会そして福岡市民の皆様に感謝申し上げます。この賞は、私の2人の娘と今は亡き愛する夫がともに歩んでくれた道のりを再確認するものです。

受賞者あいさつ

芸術・文化賞
タシ・ノルブ

心温かい日本の皆様、特に福岡の皆様にご挨拶申し上げます。そして、福岡アジア文化賞委員会に対し、私にこのような栄誉を与えてくださったことに心から感謝申し上げます。

私は、先祖代々受け継がれてきた歌、踊り、仮面舞踊を復活上演するだけでなく、パフォーマンスを通して民族衣装や日常の服装を紹介することに重きを置いて、ブータン王国の伝統文化の発展に努めてきました。本日、著名な皆様のご列席のもと、私の20年にわたる取り組みと貢献が認められ表彰されることを、この上なく誇らしく思っております。この賞は、私だけに対するものではなく、ブータンの国民や政府へ贈られたものでもあります。多くの国が国民総生産を増やそうと努力しているように、私たちブータン人は「国民総幸福」と言われるものを追求しています。国民総幸福の発展理論にしたがって、国民総幸福の4本柱のひとつとして「伝統文化の保存と発展」が位置づけられているのです。

私は、幼いころから音楽に包まれて育ちました。私のインスピレーションに大きな影響を与えてくれた父、ダショー・アク・トンミは、王立ブータン軍楽隊の創設者であり、ブータン国歌の作曲にもかかわりました。私は父に大きな恩を受けておりますが、同時に、私を惜しみなく支えてきてくれた家族、特に母と妻、息子と娘にも謹んで感謝の言葉を捧げます。

今日、残念ながら、我が国の若者は、物質主義や消費主義といった新しい価値観に激しくさらされています。私たちの貴重な遺産が存続し繁栄し続けるためには、若い世代が、我が祖国の成り立ちの根本である、独自の文化、伝統、価値、道義の保護管理人としての役割を引き受けるという責任を負わなければなりません。

ブータンの長きにわたって受け継がれてきた遺産は今なお生き続けています。しかし、これで満足してしまうのではなく、我が国の音楽と踊りの保存・発展にたゆまぬ努力で取り組み続け、私たちの独自の文化が代々受け継がれてゆくよう、これからの世代に言い聞かせなければなりません。これがまさしく、1987年にタシ・ネンチャが生まれた理由なのです。

この栄えある賞により、私の今後の取り組みに大いなるインスピレーションと意気込みをいただきました。皆様のような組織の支援があってこそ、タシ・ネンチャは、古来の芸術、文化、遺産を保存する主目的を達成するという、究極の目標へと力を合わせて前進することができます。

最後に、秋篠宮殿下、妃殿下、福岡市長、よかトピア記念国際財団理事長、そして福岡アジア文化賞の各委員の方々に、この授賞式を実に立派にとり行われるようご準備くださったことに対し、妻とともに謹んで感謝の言葉を述べたいと存じます。

タシ デレ（幸あれ）

市民フォーラム

玄界灘を渡ってきた民俗文化

日　時： 9月17日(土) 16:00～18:00
会　場： アクロス福岡 イベントホール
参加者： 約180名

1 テーマ　文化のつながりを探る

2 プログラム

趣旨説明・出演者紹介	稲葉　継雄(九州大学大学院人間環境学研究院教授)
基調講演	任　東　権(大賞受賞者)
パネルディスカッション	
・パネリスト	任　東　権
	佐野　賢治(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授)
	永松　　敦(宮崎公立大学人文学部助教授)
	松原　孝俊(九州大学大学院比較社会学府、韓国研究センター教授)
・コーディネーター	稲葉　継雄

3 概　要

基調講演で任氏は、文化は往来しながら、あるものは原形を保ち、あるものはその土地の風土に合うように変遷し、その土地に根を張り成立していったと論じ、文化伝播の根源を現在の韓国と日本の民俗文化の事例を交えて解説した。

パネルディスカッションでは、佐野氏は朝鮮半島と日本の地理的特性からみた文化の交流及び民俗信仰の対象である木造物や石造物について、永松氏は筑前琵琶の例を挙げ盲僧が果たした役割と歴史について、松原氏は海女や祭り等の海に関わる民俗文化について、各々具体例を挙げて韓国と日本の類似性を説明した。松原氏が「人の往来は文化の往来。文化は人が持って移動する」という任氏の説に言及すると、任氏は朝鮮通信使の例を挙げ、職人や僧などとの交流を通して文化の伝達があった一方で、唐人踊りなどのように大衆との生活交流の中から伝承されたケースもあると、人と文化の移動について論じた。

最後に稲葉氏が、韓国内でも沿岸と内陸の文化が違うことや、伝播は日本から韓国へという逆もあるという点をあげ、韓国と日本の民俗文化のつながりについて、さまざまな見方を知る重要性を述べて結んだ。

任 東 権 氏
Professor Im Dong-kwon

稲葉　継雄 氏
Professor Inaba Tsugio

佐野　賢治 氏
Professor Sano Kenji

永松　敦 氏
Assistant Professor
Nagamatsu Atsushi

松原　孝俊 氏
Professor Matsubara Takatoshi

市民フォーラム

ミャンマーの歴史発掘物語

日　時： 9月17日(土) 13:00～15:00
会　場： アクロス福岡 イベントホール
参加者： 約120名

1 テーマ　ヤシの葉をデジタルで保存

2 プログラム

趣旨説明・出演者紹介	石澤　良昭(上智大学長)
基調講演	トー・カウン(学術研究賞受賞者)
講演	奥平　龍二(東京外国語大学名誉教授)
	斎藤　照子(東京外国語大学外国語学部教授)
	伊東　利勝(愛知大学文学部教授)

3 概　要

基調講演ではトー・カウン氏が、古文献の種類や貝葉の製作工程、保存修復の方法などを映像で分かりやすく説明した。また、貝葉写本をはじめとする古文献が、喪失の危機に直面している現状を説明するとともに、保存の必要性を訴え、「古文献に残された知の歴史を守ることで、自国の文化、ひいてはアジアの文化を形づくっている各国固有の学問を守ることができる」と語った。

続いて奥平氏が、「古文献は人々の生活や自然環境の中で生み出された知恵の結晶である」と述べ、ミャンマーにおける古文献の変遷やその歴史的背景などを説明した。

その後、斎藤氏が、実際にデジタル化された古文献の映像を紹介しながら、「当時の人々の生活、習慣、文化を知るうえでの貴重な史料である」と述べ、その内容を具体的に説明した。

伊東氏は、実際にミャンマーの古文献が公開されているウェブサイトを紹介しながら、「古文献をデジタル化することで末永く保存できるだけでなく、インターネット等の様々なメディアによって世界中で活用できる」と、デジタル化することの意義を明言した。

最後に石澤氏が「古文献を保存することは、知的歴史遺産を保存することであり、それはアジアの文化を守ることである」と述べて、締めくくりの言葉とした。

トー・カウン 氏
Dr. Thaw Kaung

石澤　良昭 氏
Professor Ishizawa Yoshiaki

奥平　龍二 氏
Emeritus Professor
Okudaira Ryuji

斎藤　照子 氏
Professor Saito Teruko

伊東　利勝 氏
Professor Ito Toshikatsu

市民フォーラム

伝統を紡ぐラオス

日　時： 9月18日(日) 14:00～16:00
会　場： 福岡市美術館 講堂
参加者： 約140名

1 テーマ　無限のデザイン－受け継がれてきた織物たち

2 プログラム

趣旨説明・ラオスの文化紹介	新田　栄治(鹿児島大学法文学部教授)
基調講演	ドアンドゥアン・ブンニャウォン(芸術・文化賞受賞者)
パネルディスカッション	
・パネリスト	ドアンドゥアン・ブンニャウォン
	鈴木　玲子(東京外国語大学外国語学部助教授)
・コーディネーター	新田　栄治

3 概　要

冒頭で新田氏がラオスの位置や歴史について説明するとともに、ラオス案内ビデオを上映し、観客は徐々にラオスの魅力に引き込まれていった。

基調講演では、ブンニャウォン氏がスライドを見せながら、ラオスでの織物作業の風景を紹介し、織りの技法や文様の由来などを説明した。また、ラオスの日常生活の中で織物の役割について、楽しいエピソードを交えながら紹介した。

パネルディスカッションにおいて、ブンニャウォン氏は、伝統織物を守っていくためには、政策や多くの組織の援助が必要であり、家庭で織物の技術を学ぶことができなくなった今、織物の学校が必要であると語った。また、鈴木氏は、女性は教育を受ける機会がなかったので、文字のかわりに織物の中で自分の思いや夢などを伝えていったのではないかと語った。

ブンニャウォン氏所蔵の民族衣装を身につけたモデルが登場すると、会場は華やかになり、観客は色とりどりで個性的なデザインの衣装の特徴やその着用シーンなどについての説明を熱心に聞いていた。

最後に新田氏が、アジアには多くの民族があり、それぞれに独特の伝統織物の世界を持っている。実際にアジアに行って、この豊かな織物の世界を自分の目で確かめて欲しいと締めくくった。

ドアンドゥアン・ブンニャウォン 氏
Ms. Douangdeuane Bounyavong

新田　栄治 氏
Professor Nitta Eiji

鈴木　玲子 氏
Associate Professor
Suzuki Reiko

市民フォーラム

ブータンの伝統音楽

日　時：9月16日（金）18:30～20:30
会　場：イムズホール
参加者：約330名

1 テーマ　ヒマラヤからの歌声

2 プログラム　趣旨説明・ブータンの文化紹介　藤井　知昭（中部高等学術研究所教授）
「タシ・ネンチャ」によるパフォーマンス　解説：タシ・ノルブ（芸術・文化賞受賞者）

3 概　要

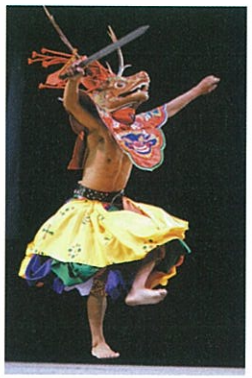
はじめに、藤井氏が受賞者であるタシ・ノルブ氏の功績を説明。引き続き、自ら撮影した映像資料を用いながら、ブータンの概要や文化を紹介した。

次に、タシ・ノルブ氏がディレクターを務める伝統音楽グループ「タシ・ネンチャ」を紹介。メンバー6人が色彩豊かな民族衣装でステージに登場すると、会場から大きな拍手が起こった。

タシ・ノルブ氏は各パフォーマンスごとに歌や踊りの解説を行い、チベット仏教の影響を色濃く残す独自の文化的背景を説明した。いつも公演のはじめに演奏するという「クズザンポー」では、ブータン民族楽器の演奏にのせて、のびやかな歌声が会場にこだました。また、レムと呼ばれるシンバルが鳴り響く中、鹿の面をつけた踊り手がステージを飛び回るダイナミックな宗教的仮面舞踊、ブータン北西部に住む民族ラヤップや東北部のサクテン村の踊りなど、それぞれ独特の衣装を身にまとって、9つのパフォーマンスが次々と披露され、観客はどこか懐かしいブータンの伝統文化の世界に引き込まれていった。最後のプログラムであり、ブータンの伝統的な締めの踊りである「タシ・レベ」では、会場から参加した飛び入りの観客も加わって、楽しい総踊りの輪ができた。

タシ・ノルブ 氏
Mr. Tashi Norbu

藤井　知昭 氏
Professor Fujii Tomoaki



学校訪問
SCHOOL VISIT

塩原小学校

日　時：9月16日(金) 14:20～15:30

訪問者：任 東 権(大賞受賞者)

生　徒：4、6年生　約170名

小学生4、6年生を対象に、韓国の民話と韓国に古来より伝わる遊びを紹介した。

民話紹介では、「ネズミの婿選び」と「雨ガエル」を紹介。民話が教える「自分自身に自信を持つことの大切さや、親を敬うことの大切さ」などの人生訓を丁寧に問いかけると、生徒たちは熱心に聞き入っていた。

話のあと、日本では正月の遊びで多く見られる双六(すごろく)と同じようにコマを進めていく韓国の遊び「ユンノリ」を紹介した。生徒達は任氏と一緒に輪になり、終了時間も忘れるほど夢中になって楽しく遊び、終始和やかな雰囲気となった。

Shiobaru Elementary School

Date & Time: 14:20 - 15:30
Friday, September 16, 2005

Visitor: Professor Im Dong-kwon, Grand Prize Laureate

Students: Approximately 170 fourth and sixth grade students

In front of pupils in their fourth and sixth grade, Professor Im Dong-kwon introduced Korean folk stories and games from ancient times.

He spoke of two stories – "Rat's Choice of Husband" and "Green Tree Frog." Pupils listened very carefully to Professor Im as he explained about what folk stories tell us about life, such as the importance of being confident in yourself and respecting your parents.

After the story-telling, pupils, together with Professor Im in a circle, enjoyed a Korean game of "Yutnori," a similar game of the Japanese variety of Parcheesi (sugoroku). Everybody became caught up in the game and time flew by until the whole program ended in a friendly atmosphere.

学校訪問
SCHOOL VISIT

福翔高等学校

日　時：9月16日(金) 15:00～16:45

訪問者：トー・カウン(学術研究賞受賞者)

生　徒：1年生　約340名

車座になった生徒たちに囲まれながら、「現代の若者に伝えたいこと」をテーマに講演を行った。

病気のため学校に通うことができず、自宅で本ばかり読んでいたという自身の幼少時代を振り返りながら、「本を読むことで"時間"と"空間"を飛び越えることができる。過去や未来のこと、そして世界のことをもっと広く知って欲しい」と、読書の大切さ、そして何よりも読書の楽しさについて語った。

その後、学校の図書館へ移動して生徒たちとの座談会が行われた。現代の若者が関心を持っていることを尋ねるなど、生徒たちとの身近な交流を十分に楽しんだ。

Fukusho High School

Date & Time: 15:00 - 16:45
Friday, September 16, 2005

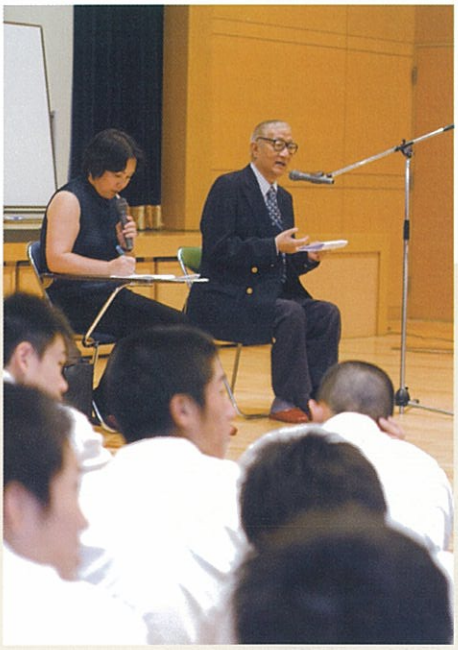
Visitor: Dr. Thaw Kaung,
Academic Prize Laureate

Students: Approximately 340 first grade students

Surrounded by students sitting in a circle, Dr. Thaw Kaung spoke about the theme "What to expect from the present youngsters."

He looked back on his childhood, during which he was unable to attend school due to illness and thus spent his time engrossed in books at home, and told the students the importance of reading, above all the joy of reading. He said: "By reading books you are able to jump between time and space. Know more about the past, future, and the world."

In the following discussion with students at the school library, Dr. Thaw Kaung enjoyed casual conversations by asking the present youngsters about their interest.



学校訪問
SCHOOL VISIT

福岡女子高等学校

日　時：9月16日(金) 13:50～15:40

訪問者：ドアンドゥアン・ブンニャウォン
(芸術・文化賞受賞者)

生　徒：1～3年生　約120名

服飾デザイン科1～3年生の生徒たちが参加した。ブンニャウォン氏所蔵のラオスの伝統衣装に身を包んだ生徒20人がモデルとなり、色とりどりの民族衣装を披露するとあちこちから「かわいいー!」という声が飛んでいた。ブンニャウォン氏が、各民族の衣装やそのデザインの特徴について説明を行い、生徒たちは興味深そうに聞いていた。最後に、衣装を身につけたままラオスの踊りを教えてもらい、ラオスの文化を身近に感じていた。

Fukuoka Girls High School

Date & Time: 13:50 - 15:40
Friday, September 16, 2005

Visitor: Ms. Douangdeuane Bounyavong,
Arts and Culture Prize Laureate

Students: Approximately 120 first to third grade students

First to third grade students in the Fashion Design course attended the program. Representing the participants, twenty students clad in traditional Lao costumes appeared as models, causing other students to exclaim "how cute!" Ms. Bounyavong explained the characteristics of the costume and design for each ethnic group, inviting students' interest and curiosity. At the end of the program, those in the costumes were taught one of the Lao dances to learn more closely about Lao culture.

学校訪問
SCHOOL VISIT

長住小学校

日　時：9月16日(金) 10:40～13:10

訪問者：タシ・ノルブ(芸術・文化賞受賞者)

生　徒：1～6年生　約580名

全校生徒が集まった体育館。興味津々の子どもたちの輪に囲まれて、伝統音楽グループ「タシ・ネンチャ」がブータンの歌や踊りを披露した。最後の演目「タシ・レベ」では、楽しいリズムにみんな体がうずうず。タシ・ノルブ氏の「よ～し、みんなで踊ろう」のかけ声で、座っていた子どもたちが立ち上がり、総勢580人の総踊り。言葉は通じなくてもみようみまねで踊りの輪が広がった。

握手攻めに合いながら体育館を後にして2年生の教室へ。子どもたちの見事な英語の自己紹介にタシ・ノルブ氏やメンバーも思わずにっこり。いっしょに給食を食べて、楽しい文化交流の一日だった。

Nagazumi Elementary School

Date & Time: 10:40 - 13:10
Friday, September 16, 2005

Visitor: Mr. Tashi Norbu,
Arts and Culture Prize Laureate

Students: Approximately 580 first to sixth grade pupils

The school gym was packed with the whole school. Drawing the attending children in a circle around them, members of the traditional music group "Tashi Nencha" performed Bhutan's songs and dances. The last program "Tashi Labey" accompanied by the pleasant and lilting rhythm made the children impatient to dance to the music. With Mr. Tashi Norbu's call out "Now, it's time to dance!," all 580 children joined in the circle of dance. No language was needed. Following how members danced, the children fully enjoyed their day of cultural exchange.

After an avalanche of handshakes when leaving the gym, Mr. Tashi Norbu and his members entered a classroom for the second graders, where they welcomed the guests with impressive self introductions in English. The children and the guests shared a school lunch to conclude a pleasant cultural exchange.